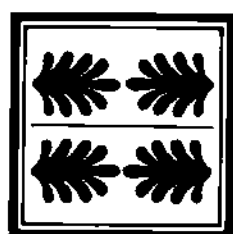


花散里 円地文子





講談社文庫

花散里

円地文子

昭和46年12月15日第1刷発行

昭和53年5月25日第8刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 8-3930

デザイン 亀倉雄策

製 版 株式会社まゆら美研

印 刷 豊国オフセット株式会社

製 本 株式会社国宝社

© Fumiko Enchi 1971

Printed in Japan

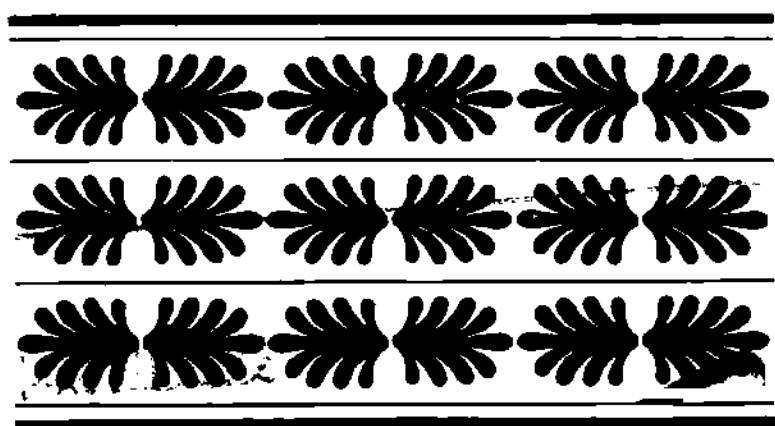
定価はカバーに表示してあります。

(落丁本・乱丁本はおとりかえます)

講談社文庫

花散里

円地文子



目次

花散里

花散里

ニューヨークだより

銀河

秋日銀杏

返り花

冬至

『花散里』とその主題

年譜

磯田光一

五 七 三六 六八 九四 一三 一三六 一六三 一七六

花散里

花散里はなちるさと

橘たちばなの唧言かこがましき裕あゆかな 蕪村うそん

ふっと眼をあくと、枕の横の障子が明るんでいた。夜明け方の弱い光線に斑立むらだって見える紙の濁りがかえりきらない葛湯くすりゆを思い出させ、喜和きわはしばらくその淀んだ白さの中にうつうつ憩やすらっていた。ぐっすり眠れたあとの肩や背にもみほぐされたような疲れが滲にじんでいて、身体全体が軟体動物にでもなったようにやわやわと快かった。寝耳に雨が降っているのかと思ったのは茶席の庭の蹲つくばいに笕かけひの水の滴したたっている音であった。京都の宿にいたのだとその時気づいた。

喜和はめつきり肉の落ちた首のうしろへ手をまわして盆の窪くぼをおさえた。そこが固くなっているのは脳溢血の前徴だと教えられて以来、朝、眼がさめると何ということなしに手が首のうしろへ行き、確かめるように揉んでみてから、自然に左の胸まで撫でおろして来て心臓の鼓動をきくのである。何の変りはないと思った途端とたん、待っていたように「あああ」とも「ううう」とも聞え

る深い息が吐き出された。吐息とも呻きとも形容出来ない疲れはてた旅人のようなその声が、身体の中の奥から吐き出されて来るのか喜和にも解らない。解らないなりに喜和は毎朝寝床で眼を醒ます度に、必ずこの心底疲れはてたような吐息を二度三度意識して吐き出してからでなければ、床を離れることが出来ないのである。五十を越えた女の内に潜まっている沈澱が朝々そういう不思議な呻きになって、虚空へ消えひろがって行くのだろうと喜和は思ってみる。声を出すことで、息を吐くことで、攣みこみようのないもどかしさへ、登りようのない高さへ喜和は漠然と抗議しているのである。みる間に少しずつ障子の白さはくつきりして来て、狭い庭に雀のさえずりも聞えはじめた。

「ほんならあのおっさん、死なはったのかいな、犬に倒されはったんやと、あの年で大きな土佐犬引いて歩くのそら無理やなあ、こけはったん？ ……ふうん、えらいこっちゃ」

尻上りの女の言葉とだみた男の声がたがいちがい聞こえて来る。竹を抱えた狭い中庭の竹垣の裏が料理場になっているらしく、朝早くから物を売りに来る商人と板場の飯炊きが話している声らしかった。「さよか」とか「ほで」とか「解せんなあ」とか「しょうむない」とかいう音の丸い間のびた京訛のつくろわなない町言葉に寝たまま耳を預けていると、話されている内容は何であつても、声音やアクセントが一種のメロディになって、家を離れた別世界に一人で旅寝している気安さとももの淋しさに喜和はしみじみ浸るのである。

今も喜和はややしばらくエトランジェとしてこの別世界の会話をたのしんでいたが、飼主の老

人が散歩させていた土佐犬の綱にひきずられてコンクリートの道に仰向けに倒れ後頭部をうって死んだという話をきいている中に、別室でねている筈の二人の友達のことを思い出した。その一人の朝吹頼子は犬の薬専門の薬局を東京と大阪に経営していて、アメリカの薬を仕入れ結構盛んに営業しているのである。

「お宅のミツチちゃんどうして、もう尻尾上ったこと？」

「いいえ、それがまだなのよ、あなたのところのアメリカのお薬のおかげでやっと足の痙攣はとれたんだけどね、あの子まだ尻尾が上らないのよ、お医者さんは時の問題で必ず上りますっていうけど、散歩に連れて出てもよその犬を見ると何だか肩身が狭そうでねえ」

「ウン、あれ、もう少し前、テンバーになる前に相談して下さると、あんなに神経を冒されるほどにはならなかったんだけどね……でもよかったわよ、まあ命をとりとめて……」

「ええ、まあ、それだけは仕合せだったわ」

朝吹頼子と鹿野艶子が昨夜湯殿で真顔で犬の病気の話をしていたのを喜和は微笑してきいていた。子供のない艶子は、犬や猫を人間化したような呼び方で話すのが好きであった。

東京にいる時でも艶子は犬の病気のことで頼子によく電話をかけるらしく、今度珍しく喜和と二人で京都へ出向いて来るのにも、留守中の犬の健康のことで頼子に電話をかけ、頼子は又、学校時代に一年上の級で、同性愛風の親しみかたをしていた喜和と一晩一緒にいたいといって、わざと京都に同じ宿をとったのである。今日は午後頼子の店の自動車が大阪から迎えに来て、西

本願寺の能舞台で演じられる能を見物させてくれることになっている。

私は疲れて眠ると歯ざしりする癖があるからと断わって喜和は自分だけ離れた茶席に床を敷いて貰った。

「あら、歯ざしりならまだいい方よ。私はよくいびきをかくんですって……」

と、頼子が顔をしかめていうと、艶子も、

「いいえ、私もなのよ、私、若い時にいびきなんぞついぞかいたことがなかったのに、この頃時言われるの……いびきって、ねている間のことで自分では解らないから厭だわ」

と、心底情けなさそうにいった。

「そう、由利さんが仰有るの」

頼子は赤い縁の眼鏡の下の眼をキラキラ輝かせ、白い歯をさばさば見せて笑いながらきいた。

由利というのは艶子の生活をみている実業界の立物の名である。

「いいえ……」

艶子にはなじろんで、

「由利はそんなこと言わないけど、この頃うちへひきとって男の子がね、おばさんのいびき、牛みたいなんていうの。寝たら最後首をかかれても解らないような子供にも聞えることがあるのかと思うと、うんざりするのよ。色気のなくなるって困ったことね。私時々女中を傍へ寝かしてきいてみるのよ。でも若い人はだれだって寝つきのいい時は白河夜舟でしよ。……ただ、それが

毎晩というわけでもないらしいことはわかったけど……」

喜和はそんな話をきいている中に、外にも世話をしている女の何人かあるという由利が艶子の家へ泊りに来る晩は月の中に何度ぐらいなのだろう。その晩にはきっと艶子はいびきが気になつておちおち眠れないのではないかと思つた。すると、一軒の家の女あるじになつていて、月に何度か通つて来る男を待つてゐる艶子の境涯が、平安朝の女流日記の主人公のように繊細な美術品じみて感じられて来た。

今度京都へ一緒に来るという話になつたのも、最初は喜和が常から選をしている大阪のある会社の句会に招かれたのがきっかけで、艶子が知恩院へ昨年亡くなつた母親の骨を納めに行きたいと言ひ出し、一緒に旅行する話になつたのである。

女学校のころに一緒に鎌倉の海岸で泳いだことがあるぐらいで、二十何年かつきあつていても、喜和は頼子や艶子と一緒に風呂へ入つたことなど一度もなかつた。新湯であとがつかえてゐるらしいのであとさきになつて、三人は風呂へ入つた。網代の敷物を敷いた脱衣場に香が焚いてあつて、木の香の新しい檜の風呂桶が、春慶塗の羽目板を張つたほどほどに広い湯殿の隅に据わつてゐた。

「まあ、艶子さんは案外いい身体をしてるのね」

さきに浴槽に浸つてゐた頼子が持ちまへのぴんぴん弾ね返るような口つきで言つて、肩をすばめるようにして入つて来た艶子をみた。眼尻や頤の肉の落ちようにうつろつた花びらのような萎

えた美しさのある艶子は裸体になると思いの外、背中や腰に肉がのっついて、乳房こそ小さく胸にしぼんでいるが、子供を生んだことのない腹の線もきっちりひきしまっている。肩が張って首がいつもしつかり筒のように据わって、上背のある頼子は、洋装の気のきいた着こなしも手つだつて嫋々とした姥桜風の艶子よりも普段は四つ五つ若く見えるのに、流しにかがみこんで膝を立てている背中では肩胛骨や脊髄の鎖型の凹凸があらわで、うすい茶色のしみもいくつか皮膚に浮いている。それ以上に喜和の驚かされたのは、頼子の立上った時、横側からみると、腰の番から下腹へかけて、まるで細いゴム紐でも強くくくったようなくびれが一筋横に這っていることだった。

「頼子さんのお腹、ゴム紐でもかけてあるようね」

と艶子が笑いながらいうと、頼子は自分ではそれほど気にしていなかったことを注意されて、あらためて驚かされた風に、しゃがんだまま腰をのばして、両手でそのくびれの上を撫でてみた。

「そうね、私、気がつかなかったわ。これいつか手術をしたあと出来た筋なのね。いいえ、傷あとは殆ど癒ってしまったのだけど、子宮がなくなってしまうから、お腹の下ところが極端にへこんできゅうっとくびれるんだわ。へえ、ほんとうにわれながら面白いものね……」

頼子は気にかける様子もなく、それから一しきり、筋腫で下腹が太鼓のように膨らんだ小十年前の病気の話をした。

「私のは癌と違^がうから無理に子宮を残そうと思えば出来ただけど、亭主は死んじやったし、子供は三人もいることだし、飛びまわるのには男になった方がいいと思って、何もかもおさらばしたのよ」

頼子は一向気にもしていないらしく、そんな風に言い、四十にならない前から月のもののうるさがなくなつてさっぱりしたと話した。

「あなた方はどうなの……まだまだ女と手が切れないんでしょ」

頼子がよく光る白い歯並びを見せて、事務をとっているような口調でいうと、普段そんな話をしたことのない喜和も艶子も何げなく生理の話に入り込むことが出来た。喜和は自分よりたしか一つ年上の筈で、身体の苦情を始終言っている艶子が思ひの外今でも正常な女の生理を持ちつづけているのに二度びっくりさせられた。そういう手術をうけた頼子は別にしても、二三年前に頭が重かつたり軽い眩暈^{めまい}に襲われた更年期の波を経験した喜和にとっては、艶子の萎えた薄物のようになよなよした身体の中に油灯のような焰がめめら燃えつづけているのが異様な発見に感じられる。そう言えば風呂場で久しぶりに流しあつた時の艶子の長い頸^{くび}を傾けた背には、さつとかける湯を弾き返すようなぬめりがあつて、細い骨を薄く包んでいる肉づきの軟らかさに、春信の版画美人のような脆弱^{ぜいじやく}な肉感がたゆたっていた。

夫という名の男と一つ家に暮^くしていながら、殆ど何日も顔を合わせることもさえない喜和は五十を過ぎて猶^{なほ}、恋人らしい媚めかしさを身体の奥に保っている艶子をみていると何とも言えない息

苦しさを味わった。

座敷へかえったあとも、三人はしばらく飽きずに、自分たちの身体についての内緒話をつづけていた。月に二三度、大阪と東京の間を飛行機で往来して店を切りまわしている男まさりの頼子が、威勢のよい話し方で女の体力について語ってきかせた。

「私ね、仕事では曲りなりに男の人に負けない自信持っているのよ。だけど、身体じゃやっぱり敵わないわね。バイヤーとの取引きなんかはちゃんとやってのけるけど、さてキャバレーだバーだって連れて歩くことになることやっぱり涉外係の男に委せちゃうのよ。……つまり私のところじゃ二人でやってることを、私の知っている店の主さんなんか一人二役でも三役でも勤めてしまうんだもの……それで、私はうちへ帰ればくたくたになって、寝るほど楽はなかりけりなのに、向うはそれから又、行くところがあるわけでしょう。由利さんなんかもそうだろうけど、男ってつくづくタフに出来てるわよ」

「でも、頼子さんみたいに活動している人はやっぱり若々しいことよ。喜和さんだってそうよ、やっぱり外へ出て若い人達と交りあっている雰囲気ってたいしたものだわ。由利がいつもそう言ってるわ」

「そんなことないわ。さっきもお風呂でそう思ったけど、この中で、一番女だって感じのするのはやっぱり艶子さんよ。髪だってふさふさしてるじゃあないの」

頼子がいうと、艶子は衿足の少し乱れた髪をかき上げながら、

「染めてるのよ、はがしたら真白よ」

と悲しそうに言った。喜和は染めてはいなかったが、この頃めつきり髪がうすくなって、朝櫛を入れる度に頭の上で合せ鏡をして、地の見えるのを眼立たせない工夫に思いの外時間をとるの
で、房々と多い艶子の髪が染めたものだとときくと、白髪にもそれ相当の苦労があるだろうと察し
がついた。

「あらそう、あなたも……私もごま塩なのよ。真白な髪のおばあさんもいいものだから、いつそ
染めずに置こうっていうのに娘や息子が鬼みたいでいやだっていうのよ。染めているのもいいけ
ど、病氣して毛がのびたりするとみつともないでしょう」

と頼子がいうと、

「そうなのよ。私、それを思うと、うっかり煩いも出来ないわ」

と艶子は真顔で言った。喜和は俳句の先輩だった婦人の死病の床を見舞った時、生えざわから
五分ばかりぞっくり灰色の髪がのびていて、顔がそれだけ長くなったように見えた時の錯覚と氣
味悪さをふと思いついていた。

胡麻塩頭の母親を息子や娘が嫌うという頼子よりも、長煩いの床の上でも、由利に白い生え際
を見せたくないと思うであらう艶子の方が、喜和には身体の奥底までしみこむ悲しさを感じさせ
た。

喜和のそういう実感を深めるように、艶子の話すことはじわじわと皮膚からしみ出すような話